大学出版

'97 夏

No.34

大学と社会を結ぶ
知のネットワーク

The Association of
Japanese University Presses
大学出版部協会

大学出版
34号

Summer · 1997

読書の周辺　絶滅の定量化 ―――― 奥谷　喬司　1

読書の周辺　本にかかわる数の話 ―――― 藤原　鎮男　6

出版の現実とフランスの伝統の香りと ―――― 中陣　隆夫　12
―パリ国際図書展に出席して―

営業部会の活動と課題 ―――― 山口　雅己　17

歩く・見る・聞く―知のネットワーク　8 ―――― 19

大学出版部ニュース ―――― 21

新刊案内 '97・4～'97・6 ―――― 29

表紙イラスト　ヨースト・アマン『職人図鑑』より
大学出版部協会マーク・デザイン　道吉　剛
〈書籍の価格は本体価格で表示〉

■読書の周辺

絶滅の定量化

奥谷 喬司

この頃の世の中、およそ芸術活動以外は何事も定量化が望まれているらしい。「何となく」とか「感覚的に」というファジーな、人間くさい感覚はデジタルの世のなかに合わないというわけだろう。

最近の環境問題と表裏一体の関係にある絶滅の危険に瀕している生物の基準もそうなってきた。そういう問題が社会性を帯び、絶滅が危惧される動植物について、これまで専門家の経験に基くかなり感覚的（定性的）判断がなされてきたのが通例であるが国際自然保護連盟はそういった「非科学性」を排し、絶滅の危機のカテゴリーを数量的に規定しようとはかっている。

ここはそれをいちいち解説する場所ではないが、連盟がいったいどんな定量的な基準を考えたか、ほんの二、三例を紹介すると以下の通りである。例えば、

・最近一〇年間もしくは三世代を通じて、八〇パーセント以上の減少があったもの。

・出現範囲が一〇〇平方キロメートル未満もしくは生息地面積が一〇平方キロメートル未満であるもの。

・個体群の成熟個体数が二五〇未満であるもの等々である。

こういう定量条件を読んでみると、これは草原にすむ大型の獣や、永年継続観察を続けている霊長類などには比較的容易に受け入れられると思える。

しかし草の蔭や地中で生涯を終える微小な昆虫や、海にすむ無脊椎動物にこのような定量的測定は容易に適用できるだろうか。なにもファジーが第一というつもりはないが、海産の無脊椎動物と四〇年つき合ってきた者としては釈然としない気持ちが残る。

浮遊生物の定量

いわゆるプランクトンの研究は根源的には定量研究から始ったといってよい。プランクトンを採集する網の口はたいてい丸い。だから、丸い網口を持ったプランクトンネットを例えば水深一〇メートルから垂直に引き上げたとすると、網口の描く軌跡から、長さ一〇メートルの円筒形の水（水柱：ウォーターコラムという）の中にいるプランクトン

を〝全部〟採取したことになる。網口の直径がかりに二〇センチメートルだとするとプランクトンネットが沪した水の分量は$3.14\times10^2\times1000=314$リットルである。プランクトンの定量はこの中に含まれているプランクトンの量つまり立方センチメートル（ミリリットル）、あるいはグラム数でも測られるが、個体数を問題にするなら、種類ごとの全数を数えることになる。

魚卵のようにある程度、幾何学的な形をしているものなら、この頃のエレクトロニクスは選別や勘定もしてくれるが、大小雑多、形態もさまざまなプランクトンの大部分の仕分けや種の査定、さらにはその雄・雌や成熟の度合などはマンパワー、それもかなりのエキスパートの知識と技術を伴ったものが必要となる。

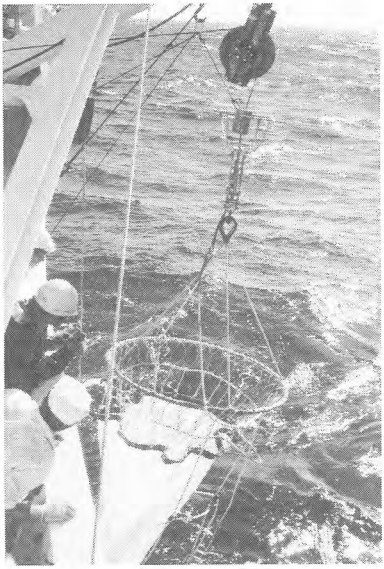
それに、ネットの網口は正確に水平であったであろうか。得てして風を受けた船は流され、垂直に引き上げたつもりのネットは、実ははすかいに曳っぱられ、水柱は理想的な円筒形からほど遠い。

ネットの網口もさることながら、網地のメッシュを代えてみよう。それだけでも見た眼にはまるで異った海からの採集物にさえ見える。植物性プランクトン（あるいはいまの生物学からは植物的というべきか――）を狙うときはおよそ一〇〇ミクロン（〇・一ミリメートル）の網地を使う。

このメッシュで採ったものを見ると主体は浮遊性の硅藻であるが、なかには甲殻類の子供なども混じる。しかし、一転して動物プランクトン用の三〇〇ミクロン（〇・三ミリメートル）程度の網地で作ったネットを用いると、かいあし類（甲殻類）を主体として、硅藻のような小型のプランクトンはみな網の目を抜けてしまい、あたかもそこの海にはそれらの植物は存在しないかのように見える。

さらに網地を大きくする。そして引き上げる速度も増すとか垂直でなく海中を水平に、あるいは斜めに網を曳き廻すともっと大型のオキアミやエビ、小型のイカ、ハダカイワシ類などがとれ、硅藻はおろか、かいあし類もいない。

これらからみても水の中に浮遊しているものの定量の困難性がわかる。人間はしばしば人間側の事情――つまり用いた網地のメッシュ、網の引き方、引き上げ機械の性能、定量の技術――などの要因によって海の中の実態を誤解し



大型プランクトンネット
（稚魚ネット）の垂直採集

てしまうこともある。

海の表面から遠く離れた中層にいる生物の定量はもっとむずかしい。他の層にいるプランクトンが混じらないように網口を閉めたまま網を下ろし、所定の深度に達したとみたとき網口を開き、一定の距離を曳いたのちまた閉じる。いまでこそワイアに電線が組み込まれていたり、あるいは無線電波で操作できるテクノロジーがあるが、ほんの二〇～三〇年前は、まったくの職人芸で多くの場合金属製の開閉装置を網口につけて、そこにワイア伝いにメッセンジャーという錘りを落してフックをかけたり、外したりした。

海でプランクトン採集に従事した人なら、必ず経験のある困難さのひとつは大量のクラゲであろう。ネットに入るとほとんど水を汲み上げるのといっしょで重量がかかる。それに粘液で網目を塞ぎプランクトンネットの沪水効果を著しく損う。それらはクラゲの研究ではない限り迷惑がられるが、もし将来「絶滅の危機に瀕したクラゲ」があらわれたら、その定量はいかにすればよいのであろうか。

海底生物の定量

海の水の中に浮いて暮らしているものは、水柱の中で算えたものをどこまで引きのばせば良いのかという問題もある。深度も、面積も、あるいは拡散の仕方やかたまり方（パッチ）がどうか――などプランクトンの場合、三次元だけではなく時間軸も絡んでくるであろう。

もしかしたら二次元の平面に生活をしている者たち（プランクトンに対応した呼び名はベントスという）は陸上の動物に近い定量ができるのではないかと思える。

昔から海藻やアワビのなどの定量方法に磯に四角い枠をいくつも設け、その枠内のものを全部採取しそれを全漁場面積にのばしてみる「坪苅り」という方法が行われてきた。

その原理を海の深い所までやってみたのが、グラブ、あるいは採泥器というベントス採集器である。それはサルベージ用のスコップのようにすくい取る道具であるが、定量的研究の立場から、なるべくその場所を撹乱せずに採る工夫が永年なされている。

ベントスの定量的調査は北海における底魚（カレイやタラ）の資源変動の原因や漁場の良否はそこにいるベントスの種類と量が鍵になっていると気付いたデンマーク人ペターセンから始ったといわれる。

桝型のグラブで海底の泥ごと採集してきたベントスの定量のための選別にはプランクトンのそれ以上の労力がかかる。それは泥にまみれている生物だけを取り出す作業がひとつ余計に加わるからと、プランクトン中にはめったに見られない生物の死体（例えば貝殻）がベントスには多い。

多くの場合、砂や泥は篩でふるい落とすが、ここで篩の目が、プランクトンネットのメッシュ同様、そこの生物相の像を狂わす。ペターセンの伝統以来メッシュ二ミリメートルの篩でふるっていたが、日本のベントス学者は一ミリメートルでなければ実情に合わないという。それは北海と

大型ベントスを採集する鉄の橇をつけたビーム・トロール

いう環境と温和な日本の海ではベントスのサイズがちょっと違うからである。しかし、さらに小型のベントスを専攻しているものにとっては一ミリメートルのメッシュを抜けてくる動物こそ大切なのである。

これなら最初の命題の生息範囲が一〇〇平方キロメートルとか、八〇パーセントの減少などの与えられた基準が適用できるかもしれない。しかし、船上から操作し海底の上に落とすグラブでは大きな面積はカバーできまい。だから逃避力があったり、あるいは広い地域に少数個体しか棲んでない大型の動物はしばしばそれから洩れてしまう。ある浜辺を小型のグラブで採集し廻って小型ベントスの種をこまかく調べたら、その浜辺には一個もアサリが住んでない（ように見える）ことになったりする。

カリカチュアの技術の優れたロシアの海洋生物学者が、グラブのまわりには、キャラクター化されたベントスが手を拍って揶揄している状景を描いている。

もっと大型、あるいは少しは移動力のあるベントスを採集するには曳き網を用いる。それは漁業で用いるトロール、底曳網などという漁具そのものである。網口幅が二、三メートルもあり、海底を曳きずるために鉄製の橇をはいている。

現代のエレクトロニックス・テクノロジーはこのような網でも海底に到達したか否か、モニターができるが、以前は張力計などが唯一の頼りであった。柔かい海底ならば安全だが、少しでも障害物があったら、網が破れるぐらいならまだしも、ワイアが切断する危険もある。

浅い所ならば船と網の位置はあまり変わらない。しかし深海トロールでは三〇〇〇メートルを超すとワイアは一万メートルくらい繰り出さないと海底に着かない。

現在は衛星などで船の位置がぴたりとわかる。また網にも音波発信器を装置してそちらの位置もわかる。しかし、そんな現代技術の発達のひと昔、ふた昔前は船の位置はそれでもロランやデッカでずいぶん正確にわかった。しかし、網の位置となると、つい船の位置イコール採集地点のような錯覚に陥るが、さにあらず、船長に「船が銀座にいるとすると網は四谷か新宿あたり」といわれたことは忘れ難い。

それでそこにいる生物は網口の幅かける海底上をひっぱった距離の面積中の数とされる。しかし、船の運動はすべて網に伝わらない。とくに海底のわずかな凹凸でも網はとび

跳ねる。ごく浅いところの観察だが、そのようなトロールに付いて潜ったスクーバダイバーが、実際にいるヒトデの数と、網に入ったヒトデの数を比べたら、たった一七・四パーセントしか入ってなかったというから、理論的に出した「定量値」は信頼性が低い。

それにこのような採集具は、あらかじめ海底地形を探索しておいて凹凸の少ないところ少ないところと選んで行う。それゆえ、近代装備を積んだ「しんかい2000」が相模湾でシロウリガイの巨大な群集を目撃発見するまでは、超音波探知器で見たシロウリガイの群集は、凹凸の激しい丘陵地に見え、そんなところで網を曳こうとする無謀な船はいなかったわけである。

こと、海の中にすむ生物に関する限り、数量的判定は極めて困難である。それだからこそ、水産資源学の世界的頭脳が一堂に会して行う国際捕鯨委員会の科学委員会でも「このクジラは絶滅のおそれがある」「いやまだ捕っても大丈夫」といった議論は果てしなく続くのである。

潜水調査船が見ているもの

海上の船からほとんど遠隔操作的にしか採集できなかった深海生物は、技術の粋を集めた潜水調査船によって新たな実像を見せはじめた。何といってもそのうちで生物界を驚倒させたのは熱水噴出孔を中心に見つかる化学合成生物群集である。その意義と実態を説明するだけ紙面のゆとりはないが、筆者もそれに関係した動物群に深く関ってきている。

昨年秋、機会があって「しんかい6500」に乗船しマリアナ舟状海盆中を潜った。ここは三〇〇度C近い熱水が、煙突状の吹き出し口から温泉のようにゆらゆらと湧き出すところが何十となく海底にある。その煙突や地われのような熱水噴出口には、そういう環境にのみ生活可能の巻き貝（アルビンガイ）やエビ、カニ、ゴカイ類がそれこそびっしりと住み、一歩、吹き出し口から離れれば、それらの姿はまったく見られないという、極端なパッチ状分布を示していた。

太平洋では水深二〇〇〇～三〇〇〇メートルには一平方メートルあたり生物が一グラムも棲まないというのに、こういうところではキログラムの単位で生物が蝟集している。おそらく浅い所でも、また陸上でもこんなに偏った生物量分布をしめすところはほかにあるまい。

そのうえ、熱水の噴き出すプレートの割れ目は、いずれ塞がるとすればこれらの生物が種をどうやって保存するのであろうか。また、現在棲息している噴出孔特有の生物群集の棲む所も決して連続した場所ではない。

こういう背景をつらつら考えてみるとこのような「化学合成生物」は常に絶滅の危機にさらされているような気もするし、その定量的評価は極めて困難である。

海の生物はどんなに人間の知恵が進んでもなお青いベールのむこうにあり、それだからこそわれわれを魅きつけてやまないのであろうか。（日本大学生物資源科学部教授）

■読書の周辺

本にかかわる数の話

藤原 鎮男

編集担当者から本欄への執筆のお誘いをいただいた。愛書、読書のどちらからいっても、小生はものの数にはいるまい。それ故、本欄の先人のような「本」についてかたむけるべき蘊蓄をもたない。考えこんだら「例えば、この一冊というような題でどうですか」といわれた。これはよい題だと思ったが、さてよく考えると、この一冊とは、専門の上のことなのか、生活上のことなのか、自分にとってのことか、後進のためのものか、などなどということが念頭にうかび、たちまち一冊ではなく数冊、それも数の多い数冊になることに気がついた。たしかに「この一冊」ということはよくいわれるけれども、どうも、その辺を皆さんお互いに、かなり適当にやってきたのであろうと思われた。それなら本の数のことだ。いっぱい書くことがあるという気になった。これが表題の説明。

出版社の数

まず関係者を自他にわける。自は出版側、他は読者。そして話を国内にかぎる。一次出版社の総数は手元の年鑑でみると一九九六年では四五六一社。出版を「物」の生産とすると、この数は非常に多い。これに対し化学工業は鉄、非鉄、金属、石油、ゴムを除く純化学で約二百社。広範な化学産品をになうものが二十分の一なのである。

経済の専門でないので勝手な見方をするが、一次産品の生産者の数が多いのは、産業発展の歴史からいうと、流通加工がない点で原始の段階かもしれない。

生産量　一九九六年度の新刊書籍が六万三千点で、販売部数総数九億一千万冊。売上金額（再販商品であるため発行金額に同じ）が一点あたり約八百万円だという。ウソ。皆さん、そして私もこの数字には驚いた。普通、商品の販売価格は製造と営業と利益の三つで分け得ると考えられる。年に一人あたり何点かの本をつくるとしても、これでどうやって出版が企業として成り立つのだろう。魔術のような数である。どこかでたいへんな無理があるのだろうと思う。

出版には他のものと違う特徴がある。普通のものの生産には、一次の産品が次々に加工され、付加価値を生み、関連した企業が膨大な世界を生むのである。ところが出版では、一次産品がそのままの形で流通末端のユーザーに展開する。これは考えようによれば、原始どころではない。一次のまま、何の加工の手間をかけずに、市場を押さえることができるのなら、生産の理想だろう。ただし、それはリスクが大きいことになる。また、産業とすると係累が少く孤立的で、戦がしにくいことになる。文化というものがそういうものなのかもしれない。だとしても、これは一般社会の常識からすると妙なことである。普通の存在ではない。そうならば、そうと割り切って普通の存在ではないとすれば楽になるかもしれぬと思われる。文化政策として、国や、社会の手で保護育成してもらうのである。

なぜ保護育成を申請するか、その理由はと言われるなら、希少動物を考えたらよい。この場合に「希少だから」というだけでは保護育成の理由にならない。「自然界にすでに存在しているものだから尊い。それがなくなってはいけないのだ」というという論理である。なぜなくなってはいけないか。それは、現代社会の指導原理の一つである効率主義と違う論理である。それは、「自然界の存在は、存在それ自体が価値をもつ」という論理である、わき道になるが、少し説明しよう。それは種の多様性の保持である。同一種の中だけで交配を続けると、数代で衰退が起こり、二十代もすると絶滅するという。それは全体の衰滅に通ずるのである。

出版、というより、文字文化を希少動物に対比するのは失敬千万である。ただ、再販制度とか、文化政策と称して、実体、保護政策の必要論を論ずるかに見える状況を見ると、保護という字面だけからは、右のような連想が出るのである。ただし、筆者の意図には卑屈に保護を願う意識は毛頭ない。価値のあるものは、その価値の保持、顕彰を大手をふって要求すべきであり、社会もそれを認めるべきだという論である。

出版界は能登のトキではない。自立自助で発展する力をもつ存在である。したがって、それへの助成を、栄養剤の補給として要求したいのである。

たとえば文化の搬送者（キャリヤー）は昔は人が担いでいったから人件費が決め手だったけれども、今は輸送流通路つまり郵便や通信経費が主である。英国は小生の知るところでは郵便面の配慮が良い。また、米国は電信、電話などの通信社会が発展して、情報知識の流通が抜群に便利で廉価である。この点、わが国は著しく遅れている。英米のような保護の施策がないのである。しかも昨今は小売りの書店の数が減り、通信販売が多くなった。この面での助成の要求くらい文化の育成として考えるべきだろう。

もう一つ出版企業の特徴として感じるのは、同根の問題かもしれないが、生産と末端が直結していることである。

これは、末端の顧客の動向が生産の決定因子になり得るということである。これはよいようでもあり、弱点でもあろう。よいというのは、先に言ったように、マーケットの意向が生産者に直結し、最終製品の設計をして成功するということで、産業の極致であり、原始どころではない最先端の製造業であることになる。ただし、それにはマーケットリサーチが整っていて、十分にマーケットの需要に応え、マーケットも成熟していて、そのニーズが生産を育てている場合であることが必要である。

学術出版　学術出版はどうしてふるわないのだろう。岡目であえて言うと、学術出版には、いま述べた製品設計とマーケットリサーチの二つともが欠けているのではないだろうか。

学術出版の発行は、一点あたり少い数千部前後のレベルである。ヨーロッパの学術出版社は、息をながくし、数十、数百の顧客を世界に求め、長時間のスタンスで商売をする。グメリンやバイルシュタインなどのハンドブックはその極端をいっている。書籍がもつ、知の維持・保存のためには、この面の出版活動は生きながらえてもらわねばならない。これは、企業活動のレベルではなく、国家の文化事業であり、国民の知的活動の成果であろう。事実、生産段階からして息の長い仕事で、グメリン教授一家は数代かけてこの編集にあたり、それをひきついだ。ドイツ政府もこのハンドブック出版を国の文化活動の一環と位置づけている。国民もそれを誇りにしており、実利の上でも、米国のケミアブに拮抗する科学技術資源として国益をあげている。わが国にも学術の出版の助成が国からも、各種文化財団からもされてきていて、それは要求の総体からいえば微々たるものであったが、それでも大きな働きをしていたのであった。ところがここ数年の超低金利政策で、せっかく育っていたその道は枯死寸前である。しかも、この出版文化の危機に、当節流行の危機管理対策の提案すら当事者から一つも出ないのは残念である。

学術出版においては、出版側に対しても一言いいたいところがある。ライフサイクルのいいかたをかりると、水源がノータッチなのである。マーケット側からの意見のフィードバックがない。学術の問題は「個」の問題で、分野も著者もその当事者を最大限尊重すべきである。このことに基づいて学術出版はこれまで進められてきた。それはそれで大事なことであるから、これまで通りにやってもらわねばならない。

それとは別の問題として、末端のユーザーの需要を取り込んだ学術出版の企画生産ができぬものだろうか。たとえば、新世代、新人類向けの高等教育素材の開発である。オックスフォード大学出版部は、世界有数の出版社である。ここを見学したのは、だいぶ昔であるが、アフリカまで市場

に収めた英語教科書出版の実績には驚いたものであった。昨年、『脳内革命』（サンマーク出版）はその一、その二あわせて五百万に近い部数を販売し、書籍売上の新記録をつくったという。これは、水源、つまり、企画・設計の初期段階に、末端の需要を取り込んだ結果の成功だったのではないか。ライフサイクル設計である。経験を旨とした科学ですら、今は分子設計、反応設計の時代である。

マーケットリサーチのない商品開発はない。新書も文庫版書籍の刊行も、元はといえば、ハンディな形態、廉価など大衆の要求を容れての出発であったといえよう。そして、近来は、それがさらに変質して、その内容は、学術普及のスタイルに変貌しつつあるように見える。これこそ望む路線である。この戦に立った学術出版のヒットが出てほしい。

書物の字数

そこでもう一度書籍の数にもどる。図書館の蔵書数である。

数をみると英米独仏加、それに日本も加えての先進国の国立図書館の蔵書数は、昨年東京でおこなわれた国立中央図書館長会議の資料をみると、おのおの数千万、それも低いほうの数千万点である。米国コロンビア大学その他の大きな大学図書館も同じ程度であり、億の桁にはとどかない。これはどういうことを示すか。

図書は人類の知的活動の成果の表現である。それ故、前述の蔵書の数は人類の「知」の数的表現といってよいだろう。とすると、「知」は、表現のメディアにのれば、数千万、延べ数億点の書籍になろうか。しかしまた、これは図書館の限界に過ぎない。数千万点という数字は、受け入れ、登録、配架スペースの限界による数かもしれず、人手と業務に必要な空間できまることなのかもしれないのである。つまり、視点をかえれば経費の問題で、財政が決定因子ということになる。つまり、「本の数」というのは、人間の知的活動の成果の表現であるとふれこめば、数千万点という数は、人知の総量と言え、また本当はそうではなく、上記の業務なり、建物の広さの実際的な条件にすぎないのか、よくわからぬことになるのである。

いちおう、書籍の総点数を知の総量の表現としよう。数千万というのは一館あたりの保有点数の上限であり、世界の実体は、数千万点を保有する館がいくつかあるわけだから、それらの保有点数の総量を知の総量として見当をつけてみようと思う。館の間の若干の重複を考慮にいれると、書物の種の総数は億か、低い方の数億、多くとっても総点数は十億点以下と推察される。

図書一点あたりの平均ページ数を四百ページ、一ページあたりの字数を千四百字とすると、一点あたりの字数は五十六万字、四捨五入で六十万となる。これに、上記の総点

出版の現実とフランスの伝統の香りと

――パリ国際図書展に出席して――

中陣隆夫

この三月九日の正午、わたしは渡邊隆男氏（日本書籍出版協会理事長）を団長とする出版関係訪仏団一行六五名の一員として、成田からパリ・ドゴール空港を目指して出発した。

一行の主たる目的は十日から十七日までポルト・ド・ベルサイユの展示会場で開催される、仏国出版組合（FPA）主催の恒例行事である「本の祭典」－第十七回パリ国際図書展（サロン・ド・リーブル・ド・パリ）への参加と、明日に予定されている日仏出版会議に出席することである。

わたしは年度末の教科書搬入などの仕事や、会議で話す内容をどうするか、資料は、OHPはどの程度使えるかなど、頭の中をグルグルさせながら十二時間後にはパリの空港に降り立っていた。

翌日早朝、モンパルナスのホテルのベッドがデスクになってしまうような始末で発表の準備。その傍ら繁忙期の東京へファックスの第一報を入れ、朝食もそこそこに日仏出版会議の会場であるフランス国会上院議員会館にむかった。会場は、カルチェ・ラタンのオアシスといわれる、広大なリュクサンブール宮公園の中にあった。

会議は約百名の関係者が出席するなかで開かれ、はじめにエロール仏国出版組合長と渡邊隆男理事長の挨拶があり、引き続いて五味俊和氏「日本出版界の現状」、小山英俊氏「日仏の翻訳出版、版権取引」、前田完治氏「マルチメディアと出版」、石崎津義男氏「再販・定価制度、出版流通」と、それぞれのテーマに沿って両国から貴重な発表がなされた。

わたしはこれに次いで、第五のテーマ「学術・専門書出版（科学・技術・医学書：STM書／人文・社会科学書：HSS書）」－「日本の学術出版」について英文レジュメを配布、同時通訳で三〇分ばかり管見を述べた。

「今世紀の日本の書籍出版は、高等教育の大衆化や科学・技術の大きな発展による豊かな生活と、その代償であるかのような国際的な政治・経済上の摩擦、さらには地球環境破壊という複雑な背景の下に、隆盛を極めた。こうした前提の下に、『日本の学術出版』をその出版態様から二つに分けてみて見よう。その一つ『書籍出版』は、戦後急激な増進をはかってきた。が、世紀末を迎えた今日、若年人口の減少、コンピューターによる情報技術の変容によって大

きな曲がり角にさしかかっている。いま一つの世界に向けた日本発の『学術ジャーナル』（STM）の論文生産量は、米国につぐ世界第二位を占めるに至っている。しかし、今日学術出版の世界がひろく一般の人々に開放されるためには、お国の偉大な思想家、モンテーニュが〝私は何を知っているか？　何も知らないではないか〟と説いている言を一般人のものにもすべきで、一部の学者だけのものにしてはならない。科学の進歩めざましい今日、地球人が本来の意味での豊かな生活を楽しむためには、豊かな教養が必要だし、出版の使命もそこにあるだろう。これは、お国の著名な文庫「クセジュ」の精神でもある。来たる二一世紀の学術出版は、地球人に理解される人権尊重の科学・技術研究をサポートするものでなければならない。」

大要以上のように述べたが、発表するわたしの脳裏の片すみには、モンテーニュの言葉が、かつてないほどリアルに迫って点滅していた。「知る」とは、どういうことなのか、――この国の伝統的な百科全書的な知的営みが、決して羅列的部品的なものではなく、系統的統一的知性をめざしているものなのに、今日の「めざましい」科学的進歩が地球人と敵対的に対峙しているかのような状況に陥っているのは、「知る」ことが前者のような誤解の下に営まれてきたからではなかろうか。そう考えたわたしには、「何も知らないのではないか」と諭す、モンテーニュの肉声が確かに耳に達したような思いがしたのである。文字通りの豊かな生活のために、「知る」営みの内実が、今問われているのではないか。その点で、出版人は批判的に何に思いを致し、出版本来の使命の特に何を育まねばならないのか――この国の豊かな文化的伝統のオーラを浴びたのか、わたしはひとしきり、こんな思いに囚われていた。

発言を終えてホッとしたが、演壇のとなり、つまりわたしの横にいらした司会者がアラン・グルンド国際出版連合（IPA）会長だとカンタン・コリーヌ嬢からあとで知り、光栄の思いで再び上気してしまった。

わたしに続きフランスの学術出版についての二つの現状報告は、かなり現実的な課題に及ぶものであった。

M・S・ゲドン女史（エディアンス社、FPAのSTMグループ代表）の報告はこうである。

「科学・技術・医学書（STM）は総出版点数の八・〇％、売上金額で五・五％を占め、輸出面でも活発である。一点あたりの平均発行部数は二二五〇部、中には千部以下のものもある。わが国ではほとんどの出版社が、ちょうど専門書店があるように、独自の出版分野をもっている。STMには、二つのレベルがある。一つは、大学一、二年生のカリキュラムに合わせた応用問題入りのものだが、これはわが国と外国では修得単位数が異なるので、輸出は難しい。二つ目は研究者レベルのものだが、こちらは反対に海外に輸出されることが多い。」

二人目のフランソワ・ジェズ氏（FPAのHSS書グルー

プ代表）の発言は、多岐にわたるものであったが、要約すると次のようにまとめられよう。

「ハード・コア（高レベル）の研究書が四〇％（三～三五〇〇円）、教科書や古典、専門辞書を含むものが六〇％（千～二四〇〇円）の二つのレベルに分極化している。研究書では、八〇年に二二〇〇部、八八年に一二〇〇部、九六年には七～八〇〇部と急減し売れなくなった。一方では、九百ページもあるアナール派の歴史書が数万部出る時もあるという現実がある。また教科書的なものでは、八〇年に三五〇〇部、八八年に七五〇〇部と上昇したが、九六年には横這いとなっている。学際主義のあと極度な専門書化がおこっている。読者は実用的な知識だけを吸収し、試験に通ればよく生協にある就職につながるものだけに片寄っていることに背景があり、いずれにしても仏国学生二百万人の市場で、学術書は売れなくなってきている。そんなことが反映してか、編集者としての仕事をせずにＤＴＰを使って著者に任せっきりで出版をやってのけるという、アウトサイダーの出版社も二、三社あらわれ、われわれは事態を懸念している。彼らは編集者の『眼』を持ち合せていない。こうした品質のない専門書が安易に出版されるようになれば、フランス文化のレベルにも影響を与えるだろう」と。

わたしは耳を傾けながら、日仏の抱える実情と嘆きは同じだとの思いを深くした。

なぜそうなったのか。学問が「ジャーナル情報」化したために、相対的に学術書が学者・学生にとって、古くさく、重たく、値が張る、無用の長物と化したためだろうと、わたしは考える。したがってこの影響は、ＨＳＳ書出版社よりＳＴＭ書出版社のほうがはるかに被っているはずで、実績からみても、学術・専門書は学者からも学生からもソッポをむかれてしまっている。そこで出版社のほうでは、これにコンピューターによるコストダウンを図って対抗しているが、わたしはそれが決して学術出版の将来を見通した根本策ではなく、「対処療法」の域を出ないものと見ている。

会議は、西村正徳氏の「マンガについて」の発表で終了したが、やはり全体を通して日仏の出版事情には互いによく似た傾向が多く見られ、今後とも両国の情報交換を密に続けていこうとの結論で、七時間におよんだ会議は締めくくられた。

もう一つ、この会議の記録としてとどめておかねばならないのは、再販制度維持の問題についてである。

報告によれば、フランスで一五〇店舗にものぼる専門書店が今日あるのは、定価制度（＝再販売価格維持制度）があったことによるもので、もしなければ、関係出版社は生き残れなかっただろうとのことであった。こうした報告をふまえ、あらためて国際舞台で再販制度の意義が確認され、日本の再販売価格維持制度は守られねばならないとの趣旨で日仏両出版団体の「共同声明」が発表されたが、まこと

リュクサンブール宮殿での第１回日仏出版会議（1997年３月10日）

に喜ばしいことであった。

終わって、講演発表のおみやげに、リュリの創始したフランス・オペラを充実させてバロック・オペラを確立したといわれる作曲家、ラモーのオペラ・バレー『ザイス』のCDをいただいた。今も時折聞くが、くつろぎによい音楽であり、聞くたびに祖国の芸術に対する贈り主の品のよい自負を感ずる。

さて、翌日の十一日の夜にはパリ国際図書展の前夜祭が催された。会場は展示会場、つまりポルト・ド・ベルサイユの展示会場その場であった。三万五千平方mの空間に約一二〇〇社からの二五万点の本が展示されている中での前夜祭である。今年の図書展は、スペイン（九五年）、米国（九六年）の招待国の成功につぐもので、今回はこの国の伝統的なスタイルとして、作家、読者、出版社の三者の友好的な交流が展開されたのが大きな特色であった。また、これまで仏国の出版と馴染みの薄かった「日出づる国－日本」をテーマに特別招待国として、ここ十年間ほどに仏語に翻訳された日本の文学作品を初め、これまでの日本の出版物を網羅して、日本固有の神秘的とも見える日本文学の本質に迫りたいとの趣旨の案内状を読み、これでなくては世界に冠たる芸術の国にはなれぬわけだと、あらためて「老舗」の格式に恐れ入る思いであった。

こうした事情もあってであろう、筒井、吉本、谷口、安野、市川など、作家、漫画家、絵本作家の諸氏が招かれ、

関係者と交流を重ねていた。

前夜祭にはドスドブラジ文化大臣も出席され、『源氏物語』の翻訳者で知られるルネ・シフェール教授に文芸勲章が授与される一幕もあり、さらにこの五月にオープンの日本文化会館館長になられた「ちょっとキザな」磯村尚徳氏も姿を見せ、記念撮影に快くおさまるなど、この広大な会場に日仏交歓の輪が幾重にも広がっていくようであった。

翌十二日、わたしはフェア会場で、楽しみにしていたカタログ収集を敢行した。はた目にはフェア毎の「奇行」とも見えるものだが、今回はレジ係のお嬢さんの青い眼を横目に見ながらの所行で、二時間ほどで小さな段ボール箱一杯になり、ホテルにタクシーで運び込んだ。

ブック・カタログがタダで、お土産にもなるという浅ましい理由からだけではない。カタログ・デザインの参考にするためという理由があり、特に今回は、その形・色・模様・配列など、フランスのそれは英米のものとは違い、余白と小さなポイント文字、淡い色彩のデザインで、見る者の目は一点にフォーカスされるという按配で、そこに、フランスの気難しい批判精神がろ過されてこその「洗練」があるような思いがしたものである。

公式行事も終わり、解放された気分でふとコンコルド広場のベンチに腰かけてみた。中央の二、三mもあるオベリスク（方尖塔）越しに空を仰ぐと、もう春を迎えている陽気がみえる。パリには五〇万本の樹木があるというが、その一六%がマロニエだそうである。その並木が続き、多くの美術館や無数の記念碑、西にはエッフェル塔が望める…。ホテルへの帰路、セーヌ河に沿って歩き、立ち寄った書店で美しい古書の宝庫、ミラーの『コレクティング・ブックス』を求めたりしたが、連れの友人が歩きながら顎を二度三度手でひねってから、「編集部員はふえたが、編集者が減ったね」とポツリと言ったのも、今では旅の思い出の一コマとなっている。

オランジュリー美術館でモネの「睡蓮の間」を鑑賞して帰った夜、わたしはたまたま「感覚が、まず先になかったような知識は、すべて私にとって無用である。たえず新しく蘇ってゆくヴィジョンは、光とその変化によって変わるもので、この変化が絵画の真の主題となるのである」（セリュラス著『印象派』文庫クセジュ）との一文に接した。出版の営みの「芯」が示唆されているように、わたしなりに感じて、帰路の日を迎えた今回のパリ行きであった。

（東海大学出版会・出版部次長）

営業部会の活動と課題

山口雅己

一九九六年版の「出版年鑑」によると、日本にある出版社の数は約四六〇〇社、そのうち日本書籍出版協会に加盟している出版社は約五〇〇社である。これらの出版社はさらに出版の分野あるいは志すところにより数多くの集団を形成し、専門書出版社の集まりに限っただけでも十指に余る。そして、わが大学出版部協会をはじめ、それらのほとんどに「構成員の共同作業により販売促進をはかる」機能（あるいは使命）をもった組織が設置されている。

このようなメーカー側の共同事業が日常的に行われている業種は他にあまり例を見ないが、ある意味で書籍という商品がいかに代替性に乏しいかの傍証となっているのではないだろうか。すなわち少なくとも出版社から見れば「本は違う」からこそ、同業他社の商品と自社の商品を一緒に売り込むことができるのである。勿論スケール・メリットが働いているという事実も見逃せない。一般に専門書出版社の企業規模は小さく、単独では困難だが作業や費用を分担しあうことで初めて可能となる販売戦略も少なくない。

今般、大学出版部協会の営業部会長の任を継ぐにあたり、営業部会がどんな活動をしているのか整理してみた。これを機会に、「大学出版」読者各位にもご高覧いただければと、この一文を草した次第である。

＊　＊　＊

大学出版部協会は来年創立三五周年を迎えるが、年史を繙くと創立の一〇年後に「販売委員会」が設けられ、その三年後には「営業部会」へ発展したとされている。ちなみに、第一回販売委員会の検討事項として図書目録・新刊案内の共同発送や書籍の展示即売が掲げられており、これは現在もなお営業部会の活動の根幹を成している。とは言え、国際ブックフェアの隆盛やインターネットに代表されるテクノロジーの進歩を考えあわせれば、その具体的な内容・方法は相当変化してきたといっても過言ではないだろう。

営業部会には普及販売委員会、調査研修委員会、新刊速報委員会、データ管理委員会の四つの専門委員会がある。新刊速報委員会は、その名の通り毎月の「新刊速報」の編集・発行を主務とする。この「新刊速報」は刊行ずみの書籍のみ掲載されていることが特長で、図書館などで活用されている。これに加え季刊誌「大学出版」、年度版「新刊図書目録」、そして一九七八年以来作成している「大学出版部協会総合図書目録」（合本目録）の送付も、営業部会の大切な仕事である。この合本目録は年々厚みを増し、一

九九七年版の重量はなんと二・二キロに達する。

こうした発送業務のもととなる名簿は、大学教師・図書館・小売書店などさまざまな分野にわたるが、すべて長い時間をかけて積みあげてきたオリジナル・データである。まさに「継続は力なり」を地で行く、営業部会ひいては大学出版部協会の財産といえよう。ただし、大学や図書館関係の方々には異動が多く、名簿のメンテナンスはひと仕事である。これらの名簿を管理するとともに、先進技術の有効な利用によりデータを各出版部で共有化する環境をつくることを目指し、本年度より新たにデータ管理委員会が設置された。現段階では夢物語かもしれないが、各出版部がネットワーク化されれば、これまでの枠組みを越えた販売協力の可能性が見えてくるだろう。そしてこれは調査研修委員会の将来の検討課題のひとつとなるものである。

＊　＊　＊

大学・公共図書館への納本の拡大は、大学出版部協会が長年にわたり目標としてきたところであった。研究の成果としての学術書、大学の講義に即した教科書、大学公開の趣旨にもとづく教養書の出版を三本の柱とする大学出版部は、時として内容的には優れているが市販性に乏しい出版物の刊行に踏み切りもする。そういった場合に限った話ではないが、アメリカの大学図書館や公共図書館がそうであるように、大学出版部の出版物のほとんどすべてを購入することが日本の図書館でも慣例化されていれば、われわれにとってもどれだけ心強いことか知れない。

この課題への営業部会の取組みは、創立二〇周年にあたる一九八三年に開始された。これが現在の普及販売委員会の活動の中核を成しており、一九九七年六月現在、新刊見計納本実施図書館は八八館にのぼる。新刊見計納本に先立つ作業として、図書館の蔵書調査も同時期に開始されているが、これまで延べ五〇館で実施された。年間六〇〇〇〇点の新刊が「洪水」を起こし、従来の図書分類にあてはまりにくい学際領域出版物が増大し続ける状況にあっては、図書館の選書作業も複雑化・細分化し、自館の選書状況を過去に溯って再点検・把握したり、収集すべき新刊をくまなく迅速に入手することはかなり困難になっている。蔵書調査にせよ新刊見計納本にせよ、図書館にとって（また、大学出版部協会にとって）益するところ多いことは疑いなく、前例がないからか面倒だからか、蔵書調査を許可いただけない図書館が少なくないことは残念に思う。

この四月より東北大学出版会を準会員に迎え、大学出版活動の輪は着実に全国に広がっている。営業部会でも地方ブロックごとの新たな試みとして関西地区研究会が旗揚げをし、昨年来数回の会合を開いている。また、来年には「創立三五周年」を記念するイベントも計画されており、こういった事業の各ブロックでの成功が大学出版活動の基盤をますます確固たるものとしていくに違いない。その任の一端に連なるものとして気持ちを新たにするとともに、営業部会を代表して読者各位のご協力をお願い申しあげ、結びとしたい。

（東京大学出版会販売部長）

歩く・見る・聞く
知のネットワーク 8

コンピュータのルーツに出会う

東京理科大学近代科学資料館を訪ねて

JR飯田橋駅から神楽坂方向へ下り、外堀通りを市谷方向へ。案内には「徒歩六分」とあるが、そんなにはかからない。理科大学工学部とイングリッシュ・カウンシルの間の道を右に曲がると、すぐ左に東京理科大学近代科学資料館のファサードが見える。

高層の校舎の陰になって、通勤に急ぐビジネスマンの目には入らないかも知れないが、濠を渡る緑の風に誘われて、ふとこの道に足を踏み入れた人は、一瞬タイム・スリップしたような感じに陥ることだろう。

掲示によればこの建物は、明治三十九年に新築された、理科大学の前身・東京物理学校の校舎を、遺されたたった一枚の写真をもとに、出来うる限り忠実に復元したものだという。館内の展示物もさることながら、この建物自体が展示物であり、科学技術の結晶なのだ。

＊　＊

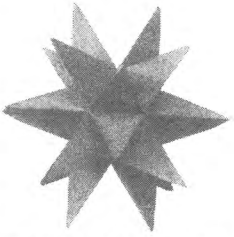
同大学図書館所蔵の和書が多数展示されている。吉田光由『塵劫記』、關孝和『括要算法』、福澤諭吉『訓蒙窮理図解』……。当然といえば当然だが、数学や物理学の本が、縦書き和綴じの手稿本や木版であるのは面白い。

明治期の実験器具がある。現存するわが国最古の化学天秤をはじめ、水準器、手回し発電実験装置など。キログラム原器のレプリカを見て、理科の教科書をなつかしく思い起こした。菱田為吉の製作になる木彫の多面体模型は、一瞬エッシャーかと目を疑った。しかし、エッシャーは菱田より、生没ともに三十年ほど後の人物である。

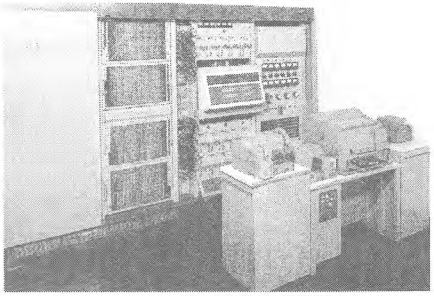
＊　＊

メインは算具、そして計算機。算木、筮竹（ぜいちく）や沖縄の藁算（ばらさん）にはじまり、世界各国のそろばんがある。歯車式の手動計算機になると、後期のものであれば私にもかすかな記憶がある。しかし一九〇〇年代初頭の携帯用計算機が実にモダンなのには驚かされた。薄く、小さく、鉄筆を使って操作するところなど、現代の電子手帳にそっくりだ。

左手奥には、パラメトロン電子計算機（FACOM201）



菱田為吉の木彫多面体模型



パラメトロン電子計算機（FACOM201）

が鎮座している。一九六〇年から同大学で研究・教育用に使用していたものだそうだ。かなり大きい。設置するには、入力装置を含めると六畳一間では足りないかも知れない。説明書に、「このコンピュータの性能は、次のものとほぼ同じです」とあって、テープが貼ってある。テープをたどると、そこにあるのはシャープのポケコン。一〇センチ×二〇センチほどの大きさもないだろう。厚さはわずか一センチ程度。この間まだ、四十年は経っていないことを考えると、空恐ろしいような気さえしてくる。

＊　＊

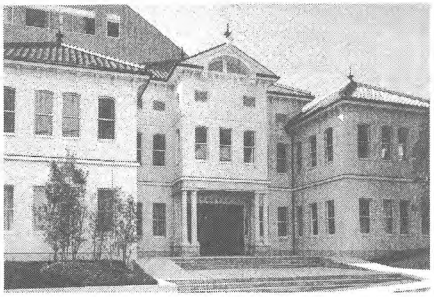
この資料館には、以上の他、現在はエジソンによる発明品・改良品が多数展示されている。館長の加藤正義教授によれば、期間は今のところ定めていないものの、常設ではないということなので、関心のある人は早めに見学されるとよいだろう。

自動電信機、磁石式電話機、白熱電球、扇風機、各種の蓄音機、直流モーター、直流発電器、映写機、ラジオからアイロン、トースターまで。展示場の中央奥には、エジソンが改良した蓄電池を積んだ電気自動車もある。

教科書や偉人伝でおなじみの白熱電球は、第一号こそレプリカだが、当時の炭素電球は、来館者がボタンを押して、点灯してみることができる。フィラメント保護のために電圧を落としていることもあろうが、その暖かく、ほのかな輝きは感動的ですらある。

科学技術批判が枕詞ともなっている昨今ではあるが、技術自体に罪はあるまい。少なくとも私にとって、少年時代の科学技術への夢とあこがれは、持ち続けたい、失いたくないものの第一であることを、あらためて確認したひとときであった。

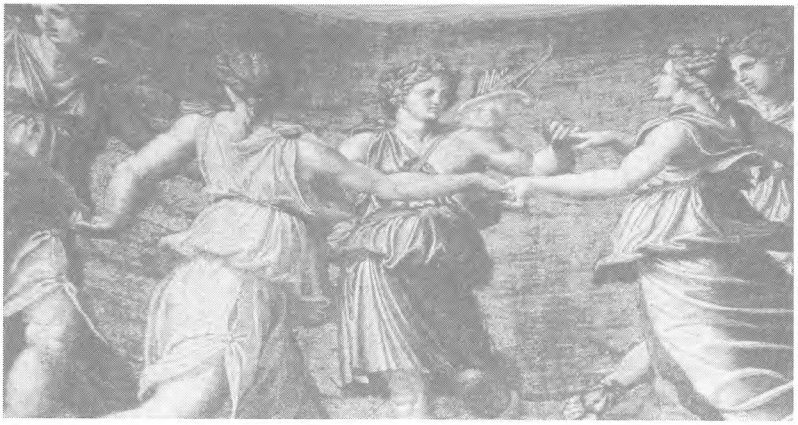
（法政大学出版局・秋田公士）



東京理科大学近代科学資料館

〒162　東京都新宿区神楽坂1-6-4　若宮町19
☎(03)3260-4271　内線1780
観覧料　無料
開館日時　毎週土曜日　10：00〜16：00
（ただし、団体等により事前に予約を受けた場合には、支障のない限り特別に開館する）
交　通　ＪＲ飯田橋駅改札（新宿寄）から徒歩6分。東京理科大学キャンパス内

大学出版部ニュース



北海道大学図書刊行会

▼『北海道の地すべり地形データベース』（地すべり学会北海道支部監修、山岸宏光・川村信人ほか編著、B4判＋CD・ROM、二六〇〇〇円）　北海道の地すべり地形一二八〇〇カ所の行政区分、規模、標高、滑動方向、滑落崖地質、基盤地質その他の諸データを書籍に表示すると共に、CD・ROMに格納して提供。防災・道路・農林地・水利等の諸計画や環境問題に携わる行政担当者・研究者・技術者必携の書。『北海道の地すべり地形－分布図とその解説』（一九九三年刊、日本生命財団出版助成）の姉妹編。

▼『地震による斜面災害－一九九三～九四年北海道三大地震から』（地すべり学会北海道支部編、A4判、二五〇〇〇円）阪神大震災を上回る斜面災害の実体と関係諸機関による対応の生々しい記録。

聖学院大学出版会

▼新刊の『キリスト教学校の再建　教育の神学　第二集』（学校伝道研究会編）（本体　三四〇〇円）は『教育の神学』（一九八七刊）の続編で、神学者、教育学者、憲法学者、学校運営に責任を担う教員による論文集。キリスト教学校をその歴史的貢献、存在意義等を今日的な視点から見直し、再構築を目指したものである。

▼近刊の予定としては、J・L・アダムス著（柴田史子訳）『自由と結社の思想－ヴォランタリー・アソシェーション論をめぐって』

慶應義塾大学出版会

▼『マルチメディア社会の著作権』苗村憲司・小宮山宏之編著　Ｋｅｉｏ　ＵＰ選書（二四〇〇円）マルチメディアとインターネットが招来する高度情報化社会を見据え、著作権の果たすべき役割と課題を指摘する。幅広い立場から対策を考察し、新たな法理論を提唱した、ＳＦＣ（湘南藤沢キャンパス）からの研究成果。

▼『「スポーツ医学」のすすめ』Ⅰ・Ⅱ　慶應義塾大学スポーツ医学研究センター編／山崎元監修　Ｋｅｉｏ　ＵＰ選書（各一五〇〇円）あらゆる成人病（生活習慣病）の源である〝シンドロームＸ〟に克つための運動処方を、最新の研究成果から提示する。Ⅰ＝「からだと運動」についての新しい知識を紹介。Ⅱ＝「運動と食事」の考え方と実践法を解説。

▼『法と正義のイコノロジー』森征一・岩谷十郎編著　Ｋｅｉｏ　ＵＰ選書（二六〇〇円）古今東西の絵画にこめられたメッセージから、法文化の魅惑的な表情とその背後に秘められた精神を探究する。イコノロジー（図像解釈学）の手法を導入することで、文献を頼りとする法学に新しい地平を拓く、斬新な法文化論。

産能大学出版部

▼『女性（あなた）が輝く時代（とき）―ポテンシャルを開く21章―』（日本ＢＰＷ連合会編、一六〇〇円）

日本ＢＰＷ（Business & Professional Women）連合会が、年に一度選ぶベストメン賞〈一九八五年の国連婦人の一〇年にあたって、平等・開発・平和の実現につくした男性をたたえようと創設された賞。以降、当クラブの事業として、毎年全国の会員からの推薦をもとに選考を行っている〉。その受賞者より二一人の方々が、女性が生き生きと活躍できる「男女共同参画社会の実現」という大きなテーマのもとに、各自ユニークな視点で執筆したのが本書である。

岩國哲人・横道孝弘（共に衆議院議員）、平岡敬広島市長、福原義春資生堂社長、嘉悦康人嘉悦学園理事長、なだいなだ、越原一郎名古屋女子大学理事長・学長の各氏をはじめとする、政治家、経営者、教育者、作家、ジャーナリスト等の、幅広い知識人からの珠玉の提言の数々。女性の生き方、社会・企業での活躍に大きな示唆を与える書である。なお、本書は文部省委嘱事業でもある。

専修大学出版局

▼宮坂宏編訳『増補改訂　現代中国法令集』（四五〇〇円）八九年の天安門事件以後の中国の法と政治の知識を概観するため、九三年に初版が刊行され、本年七月香港の中国返還により今後さらに経済を中心に様々な交流が盛んになることに鑑み、今回大幅な改稿を加えた増補改訂版が出される。本書が中国と関わる人々の便宜に資するものとなろう。

▼大庭健他編『シリーズ性を問う1　原理論』（二八〇〇円）進化の古層から現代のゆらぎまで、アクティヴな性を気鋭の二五人が書き下した全5巻シリーズの第一弾。性はなぜ存在するのか、性淘汰理論、服飾における性意識とその装置、人間と時間と性、愛と性意識の変遷など、各分野から性の諸相にきりこんでいる。

▼『シリーズ性を問う2　性差』（二八〇〇円）シリーズ第二弾。性差というものが生物的、社会的、文化的のどの規定で形成されたか、各分野の専門家が解き明かし、男女の平等化へ向けて、私たちは今後性差とどのように付き合っていくかを考える。一見関連性のない各論からトータルな認識が読みとれる。

玉川大学出版部

オーストリア国立スキー学校の全面的協力を得て、スキーの指導のしかた、学習法の解説をCD－ROM版で刊行。かつて小部で同種の企画を書籍で出したときは、五〇〇〇枚、一万枚の連続写真から選びぬかれた組写真からスキーの技術を読み取ってもらうしかなかったが、今回のCD－ROM版では、ビデオ映像、アニメをふんだんに駆使して、練習課題、技術用語を学習できるシステムになっている。スキーと科学の国際会議で紹介され、画期的な試みとして注目されている。初心者から上級者レベルまで対応。

▼玉川学園体育センター編『スキー学習サポートシステム』Windows版、Mac版、各九〇〇〇円。

中央大学出版部

宗教・思想・哲学・文化の源流は、神・正義・道徳・知性の言葉で言い表されており、人々の精神生活に広く深く根ざしています。

冷戦が終焉し、世界は束の間の平和を享受しているかに見えますが、今日の宗教・民族問題はその解決の難しさを改めて感じさせ、国際連合も未だその超越力を発揮しえないでいます。

この混迷の中にあって我々人類は、かつて行ってきたように、それぞれの人々が、それぞれの主義主張に従い、限りない知性を発揮してこの時期を乗り越えていくことと考えています。

人類の諸叡智といわれる「諸思想・世界」を知り、豊かな知性を育むことこそ新しい世界への道標となるであろうと考え、本書をお届けするものであります。

東海大学出版会

▼『ハンセン病医学－基礎と臨床』（大谷藤郎監修、斎藤肇・長尾榮治・牧野正直・村上國男編集、本体価格四八〇〇円）

一九九六年四月一日、明治四〇年の法律第一一号「癩予防ニ関スル件」に源を発する予防法、「らい予防法」が廃止された。わが国のハンセン病医学者の総力を結集して、あらゆる角度からこの疾病に迫る。基礎医学・細菌学、分子生物学、生化学、免疫、疫学、病理学、治療学、臨床医学－臨床医学総論、臨床症状と診断、らい反応、治療、外科・整形外科、形成外科、眼科、耳鼻咽喉科、歯科、社会医学－近代ハンセン病医学史、ハンセン病をとりまく諸問題、輸入感染症としてのハンセン病、世界のハンセン病対策。

東京大学出版会

シリーズ「気象の教室」　気象予報士の試験がはじまって四年目に入り、最も古い学問のひとつである気象学は新たに多くの人々の関心を惹きつけている。しかし数十年前から「大気科学」ということばが並行して使われていることからもわかるように、現代の気象学は、数学的解析が多用されコンピュータは不可欠の手段となっている。本シリーズは、誰もがこどものころから学び親しんできた気象現象と、最先端の気象学とをつなぐものとして初学者向けに編まれたものである。

最新刊『**風の気象学**』（第4巻・竹内清秀著・本体価格二九〇〇円）は『**水の気象学**』（第3巻、武田喬男ほか著）とともに気象学の骨格をなすものである。本書は、さまざまなスケールでわれわれの生活に影響を与えている風の法則を明らかにするとともに、環境、災害、運輸・通信、建築、風力エネルギーなどの応用的側面にも触れる。

シリーズは『**1グローバル気象学**』、『**2ローカル気象学**』、『**5気象の数値シミュレーション**』、『**6気象の教え方学び方**』を加えて全6巻の構成。

東京電機大学出版局

インターネットブームの中、ホームページも星の数ほど作られています。大きな資金がない中小企業や個人などでも気軽に情報発信ができ、作り方次第で効果がてきめんに現れるのが、ホームページの魅力といえるでしょう。

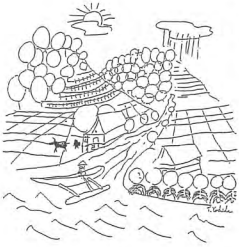
本書はインターネットはよくわからないけれどホームページは作ってみたいという初心者のために、インターネットやホームページ作成の豆知識も織り交ぜながらやさしく解説しています。前半は基本ＨＴＭＬを使って3分間でホームページを作ろうという入門編。後半は、サーバーの立ち上げやＳｈｏｃｋｗａｖｅ、Ｊａｖａなどのテクニックを紹介した中・上級編。絵が動いたり音が出たりするクールなホームページ作りを目指します。

わたしのホームページ
★やさしいインターネット
浜田晴夫監修・岡田智子著
Ｂ５判，264頁，2400円

東京農業大学出版会

▼穴瀬真、Ｔ・マンダン、Ｒ・ラスコ編「**畑作地および山間地における生態系の修復と開発**」（本文英文）ハードカバー、Ｂ５判二八七頁、カラー写真含む。

生態系の保全と維持をはかり、環境と共生した農業の創出は世界的な急務として注目されています。とくに東南アジア諸国で行われている畑地と山間地の農業は、地形・生物連鎖を利用した物質循環による生産、農業・林業の結びつき、地域レベルの生産を実践しています。本書は、インドネシア、フィリピン、タイ、日本各国から数十名の中堅研究者が参加し、三年間にわたる共同研究と討議を展開した成果をまとめたものです。土地利用の維持に関する基本概念と各国における実践例が示されています。



法政大学出版局

▼石村真一『桶・樽（おけ・たる）』
ものと人間の文化史82－Ⅰ～Ⅲ
四六判／Ⅰ～Ⅲ各巻二八〇〇円
日常生活に不可欠の木製容器として古くから親しまれてきた桶・樽をめぐって日本、朝鮮、中国、ヨーロッパにわたる多数の資料を比較検討し、そのゆたかな文化の系譜をさぐる。東西の木工技術史の視点から世界史的な視野でまとめられた初の桶・樽文化集成。

樽の製作風景
『西洋職人づくし』より

▼ものと人間の文化史／好評重版！
石井謙治『和船』Ⅰ・Ⅱ　毎日出版文化賞受賞。Ⅰ二九〇〇円／Ⅱ二四〇〇円
田淵実夫『石垣』　石工たちの技術の形成過程と伝承を集成する。二五〇〇円
矢野憲一『枕（まくら）』　神様の枕から枕絵の世界までを語る。二四〇〇円

放送大学教育振興会

▼平成九年度の新刊図書は七十七点。放送大学の九年度開設科目三百二十一に含まれ、履修登録をした学生たちの手元に、三月末日までに届けられた。
▼新刊図書の履修科目登録者数のトップテンは、①『心理学入門』②『看護学概論』③『保健体育』④『病気の成立ちと仕組み』⑤『英語Ⅲ'97』⑥『中国語Ⅰ』⑦『乳幼児心理学』⑧『フランス語Ⅰ』⑨『仏教思想』⑩『知覚心理学』である。
▼放送大学の開設科目は「生活と福祉」専攻（生活科学、健康科学、福祉関係）、「発達と教育」専攻（教育学、心理学）に特性があり充実している。卒業をめざす学生（全科履修生）の四〇％以上はこの二専攻に属していて、関連図書の需要もかなり多い。前記①、『生活学入門』、④、『老年期の健康科学』、『社会福祉の方法』、『世界の教育』、『カウンセリング』等がそれである。高齢社会の進展に即して新規開設された前記②は、全体でも第二位となり注目されている。
▼引き続き平成十年刊行予定の図書七十一点、二百名以上となる執筆陣は、取材、執筆、校正にと、おお忙しである。

明星大学出版部

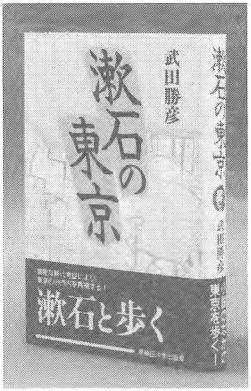
▼鯨井俊彦編著『特別活動研究』
特別活動という領域（概念）が日本にはじめて現れたのは、一九四七年（昭和二二年）の学校指導要領においてである。特別活動は、戦後の教育課程の中で、各教科、道徳とともに小学校・中学校、高等学校の教育課程の一領域を占め、児童・生徒の人格に大きな影響を及ぼして来た。
本書は、特別活動が人間形成上重要な教育活動として、学校教育の中で大きな比重を占めていることを踏まえ、特別活動の意義と課題、特別活動の変遷、小学校の特別活動、中学校の特別活動、新しい学力観に立つ特別活動と評価の在り方、そして小学校・中学校の特別活動の資料を盛り込んだ内容とした。
つまり、特別活動の基本的な事項を検討することによって、実際に特別活動がどのように学校教育課程の中に位置づけられているか、また、戦後五十年を経た今日、それが本当に実りあるものになっているといえるかどうか、今後どうあるべきかについても併せて論じられている。

早稲田大学出版部

▼『卒論・ゼミ論の書き方［新版］』（早稲田大学出版部編、一〇〇〇円）ロングセラーの旧版を全面改訂し、インターネットやパソコンの活用法をはじめ、論文の書き方を順を追って分りやすく説く。

▼『スウェーデン ハンドブック』（岡沢憲芙・宮本太郎編、二六〇〇円）高齢社会にいち早く対応し、男女共同参画社会をめざすデモクラシーの実験室・スウェーデン。その最新情報を、全編書き下ろしのヴィジュアルな構成でレポートする。

▼『漱石の東京』（武田勝彦、二八〇〇円）夏目漱石の小説を〈東京〉という観点から論じた漱石論。「吾輩は猫である」「三四郎」「それから」など七作品の舞台となった明治の東京を綿密な時代考証と克明な調査により見事に再現する。



名古屋大学出版会

▼P・J・ケイン&A・G・ホプキンズ『ジェントルマン資本主義の帝国』

Ⅰ　創生と膨張　1688～1914　竹内幸雄・秋田茂訳（五五〇〇円）イギリス近現代史を貫くジェントルマン支配と海外膨張の論理を析出。待望の邦訳。

Ⅱ　危機と解体　1914～1990　木畑洋一・旦祐介訳（四五〇〇円）戦間期におけるロンドン・シティの巻き返しとジェントルマン資本主義の力。

▼I・ウォーラーステイン／川北稔訳『近代世界システム1730～1840s－大西洋革命の時代－』（四八〇〇円）産業革命・フランス革命・ラテンアメリカ諸国の独立などを世界システム視角から考察。

▼R・ベネディクト／筒井清忠・寺岡伸悟他訳『人種主義 その批判的考察』（二八〇〇円）『菊と刀』の著者がナチスの人種主義への批判をこめて「人種と人種主義」について平易に書き下ろした古典。

▼馬場宏二著『新資本主義論－視角転換の経済学－』（三五〇〇円）資本主義の基本概念から現代資本主義論までを、大衆的過剰富裕化に焦点を合わせて新しい視角から読み解く馬場経済学体系。

京都大学学術出版会

▼『西洋古典叢書』いよいよスタート――

完成の暁には全四〇〇巻にも及ぶこの企画のシリーズが六月下旬に刊行開始する。これは、原典が残存するギリシア・ラテンの主要な古典を、すべて原典に則して完訳で紹介するというもので、わが国では初めての試みである。訳者は、あくまでも正確な原典理解をベースとした上で、一般読者層にもアピールできるように平明な日本語訳を目指した。第一期全一五巻のうち一三冊が本邦初訳または初完訳であることも特色のひとつといえる。第一回配本・プルタルコス『モラリア14』戸塚七郎訳／『英雄伝』で著名な著者が、エピクロスの快楽主義を多面的に批判した哲学論文集。

▼『鈴鹿本 今昔物語集－影印と考証－』安田章編（上・下巻）／『今昔物語集』成立に深くかかわる史料として知られていながら秘蔵されていた鈴鹿本…。今回、修理され国宝に指定されたのを機に鮮明な影印を公刊する。書誌・研究史、日本史学からの論考に加え新考察、修復と年代測定の報告等、国文・国史のみならず多角的な考証も配している。

大阪経済法科大学出版部

▼田中誠一著『韓国官僚制の研究ー政治発展との関連において』韓国は、一九六一年からの四半世紀で、貧しい農業社会から相対的に豊かな工業社会へと変貌をとげた。年平均約八・三%という驚異的な経済成長率は、発展途上国から先進国へと押し上げるまでに至らせた。半世紀前韓国は、植民地支配からの解放もつかの間、南北分断、朝鮮戦争と、冷戦下の国際政治に翻弄され、反共の防壁としての存在を余儀なくされる。国家の近代化は急務であった。軍事クーデターにより大統領になった朴正熙は、明治維新後の日本の近代化をモデルに近代化作業に着手する。その核は、アメリカをモデルにした韓国軍隊で近代的管理術を身につけた軍人たちを登用した韓国官僚制である。一八年にわたる統制と抑圧により、経済発展においては成果を挙げたが、政治・行政の民主化は課題として残った。八〇年代後半に入り、民主的憲法も制定され、確実に権威主義体制から民主主義体制への移行が進みつつあるが、それは統制と経済発展優先の韓国官僚制の民主化への歩みである。詳細は本書で！

関西大学出版部

▼中城進著『教育を構想する人びと』（二二〇〇円）「教育とは何か」という問いの下に教育思想の歴史を顧みて各々の時代的背景を考察しつつ、教育構想家の動機や目的、構想の内実を検討した。ソクラテス、プラトン、ロック、ルソーら十人の教育思想家に焦点を当て、その教育思想を解題した。

▼越川正三著『太宰・漱石・モームの小説』（四〇〇〇円）太宰をヒューマー作家として新評価したあと『新ハムレット』をシェイクスピアと、「駆込み訴へ」をワイルドの『獄中記』と比較して論じた。また、漱石の『虞美人草』『三四郎』『明暗』におけるメレディスとオースティンの〈影響〉を考察。さらにモームの『昔も今も』と『剃刀の刃』を比較文学の観点から論じる。

九州大学出版会

▼熊本大学「地域」研究Ⅰ『現代の地域と政策』（清正・丸山・中村編、四〇〇〇円）、Ⅱ『東アジアの文化構造』（工藤・金原・森編、四五〇〇円）、Ⅲ『国際社会の近代と現代』（常葉・古賀・鈴木編、四五〇〇円）。今日、新しい視点からの専門分野を横断する研究の総合化が強く求められている。社会的・文化的な普遍性と特殊性を併せもつ、われわれの共同的な生活世界としての地域に生起する諸問題に焦点を合わせた、人文・社会科学系諸分野にまたがる総合研究。

▼中村都史子著『日本のイプセン現象一九〇六ー一六年』（五四〇頁、八〇〇〇円）。イプセンが明治末期亡くなると、日本でも急速に注目され始める。その注目度は、新しい文学の創造を目指す文学界、伝統的演劇の革新を目指す演劇界、そして明治末期から大正初期における婦人問題への関心の高まりに伴う教育思想界という三つの分野で際立っている。本書は比較文学研究という領域におけるだけでなく、日本近代文学研究、近代日本の思想史文化史、さらに芸能史に至る広汎な領域への、最も基本的な文献である。

東北大学出版会

平成八年十一月三十日、本出版会は誕生した。年間十点の刊行を当初の予定としている。

処女出版一点をご案内します。

▼『聴覚と言語の世界』（永渕正昭著、二五〇〇円）著者の長年にわたる臨床と研究の成果がまとめられている。耳鼻科、失語症、特殊教育に携わる研究者はもとより、大学生の教養書であると同時に、一般市民にも親しみのもてる内容になっている。図表がたくさん盛り込まれているが、その多くは著者自身の資料で、著者自身が追試・納得したものである。

全体構成は、まず音の性質をあげ、次に聴覚と言語の仕組みを説明し、正常な言語発達について解説がなされ、後半で言語障害としての難聴、失語、吃音（どもり）が聴覚、言語中枢、発話という三つの関連性で解説されている。

いずれも「脳の機能」がベースになっているが、聴覚が発声をコントロールすること。十二歳頃までの聴覚が母国語の発音の安定に必要なこと。聴覚で発話障害を治すこと、など多くの事例を中心に解説され、知的興味の湧く会心作である。

流通経済大学出版会

今年一月二〇日、第一四〇通常国会冒頭の施政方針演説で、橋本竜太郎首相は「国民一人一人が将来に夢や目標を抱き、創造性とチャレンジ精神を存分に発揮できる社会」を実現させるため「六つの改革を一体的に断行しなければならない」と不退転の決意を表明した。六つの改革とは「行政・財政・社会保障・経済・金融システム・教育の改革」がそうだというのである。

なぜか政治の改革には触れられていない。行政とは政治を具現するためのシステムであり、政治の改革なくして行政の改革はあり得ないのではなかろうか。

▼『交通の改革　政治の改革－閉塞を打破しよう－』（角本良平著、本体価格二八〇〇円、七月上旬発行）では、運輸省、旧国鉄などに長年奉職し、（財）運輸経済研究センター理事長、早稲田大学客員教授としても交通に関する実証的な研究を積み重ねてきた著者が、交通の視点から、政治、経済、社会のあらゆる面に重くのしかかっているこの閉塞状態から脱却するための処方せんを明示している。

大阪大学出版会

懐徳堂が生んだ日本の思想史上の偉才富永仲基や山片蟠桃は、知的空間としての近世大坂がなくては生まれなかった。

▼脇田修・岸田知子共著『懐徳堂とその人びと』四六判・予価一五〇〇円、九月刊予定。懐徳堂を近世大坂の町人文化のなかで位置づけると共に、個性あふれる学風やその人びとをやさしく紹介。

▼既刊類書：研究書として、陶　徳民　著『懐徳堂朱子学の研究』A5・六五〇〇円、図録として懐徳堂友の会他編・発行『懐徳堂－浪華の学問所－』A4・二〇〇〇円（本会が発売元）がある。

▼藤本和貴夫・木村健治編『言語文化学概論』A5・予価二三〇〇円、九月刊予定。言語文化学を独立した学問領域として捉え、初の体系化を試みる。

▼Gerry Yokota-Murakami著『The Formation of the Canon of Nō－The Literary Tradition of Divine Authority』菊判・五一四六円。邦題『能謡曲の「カノン」－古典とは何か』。前号の本欄および新刊ニュースで、上記書名から「Canon of」が抜けていました。訂正してお詫び申し上げます。

新刊案内 '97・4～'97・6

■北海道大学図書刊行会
近代アイヌ教育制度史研究　小川　正人　七〇〇〇円
シベリアの旧石器文化　木村　英明　八五〇〇円
雑草の自然史―たくましさの生態学―　山口裕文編著　三〇〇〇円

■聖学院大学出版会
現代中国の党政関係　唐　亮　三四〇〇円
マルチメディア社会の著作権　苗村憲司／小宮山宏之編著　二四〇〇円
法と正義のイコノロジー　森　征一／岩谷十郎編　二六〇〇円

■慶應義塾大学出版会
スポーツ医学のすすめ　I　慶應義塾大学スポーツ医学研究センター編　山崎　元監修　一五〇〇円
スポーツ医学のすすめ　II　慶應義塾大学スポーツ医学研究センター編　山崎　元監修　一五〇〇円
比較　裁判外紛争解決制度　石川　明／三上威彦編著　三六〇〇円
民法の体系―市民法の基礎―　松尾　弘　五〇〇〇円
新版　日本の肢体不自由教育―その歴史的発展と展望　村田　茂　二八〇〇円
帝大新人会研究〈慶應義塾大学法学研究会叢書67〉　中村勝範編　七一〇〇円

■産能大学出版部
機長のマネジメント　村上耕一・斎藤貞雄　一八〇〇円
新事業・新商品開発の立役者たち　情報交流会編／大坪建著　二四二七円
ミニ独立採算制経営の進め方　窪田　千貫　一七四八円
電子会議革命　石川昭・堀内正博　一七〇〇円
新しい物差し　谷口　正和　一六〇〇円
サラリーマン自分づくりのすすめ　北野大・藤江俊彦　一五〇〇円
電脳ヒット・マーケット　赤澤　基精　一六〇〇円
起業家型マネジメントの方法　W・クリストファー著／俵実男訳　一五〇〇円
「小糸」・「ブーン・ピケンズ」事件　後藤　光男　二五〇〇円
女性が輝く時代　日本BPW連合会編　一六〇〇円
3分間発想法　山口　善民　一六〇〇円
日僑型起業がアジアを制す　増田　辰弘　一八〇〇円
マーフィー愛の人生相談　マーフィー理論研究会編著　一五〇〇円
魅力あるエグゼクティブのマナー　藤田　桂子　一六〇〇円
大企業サラリーマンの肩書き時代の終わり　佐藤　忠　一五〇〇円

■専修大学出版局
増補改訂　現代中国法令集　宮坂宏編訳　四五〇〇円
シリーズ性を問う1〈原理編〉　大庭健他編著　二八〇〇円
シリーズ性を問う2〈性差〉　大庭健他編著　二八〇〇円

■玉川大学出版部
愛吟集　玉川学園編　一六〇〇円

ベンツと自動車－原図で見る科学の天才－　D・ナイ／川上顕治郎訳　一八〇〇円
現代の国際関係とマス・メディア　日比野正明編　二八〇〇円
ベーシックスクール－アメリカの最新小学校改革提案－　E・L・ボイヤー／中島章夫監訳　三二〇〇円
近代世界の公共宗教　J・カサノヴァ／津城寛文訳　六五〇〇円
亀堂閑話　梅若万三郎　三八〇〇円
ニホンミツバチ誌　岡田　一次　二五〇〇円
ダンスの教え方・学び方　M・ゴーフ／玉川まや子訳　二八〇〇円
校長のリーダーシップ　T・デール、K・ピターソン／中留武昭監訳　三〇〇〇円
大学教育研究の課題－改革動向への批判と提言－　一般教育学会編　六〇〇〇円
日本の大学　大久保利謙　四四〇〇円
アメリカの公共生活と宗教　L・ケディ／渡部正孝訳　四〇〇〇円

■中央大学出版部

人類の叡智に学ぶ　中央大学出版部編　二三〇〇円
ヴィジョンと現実－十九世紀英国の詩と批評－　中央大学人文科学研究所編　六八〇〇円
独占禁止政策と独占禁止法　伊従　寛　九〇〇〇円
法律家を目指す諸君へ九七年度版　中央大学法職講座運営委員会編　二〇〇〇円
社会史の展開－宗教と社会－　田村　秀夫　二五〇〇円

■東海大学出版会

留学の愉しみ－異国の歴史や文化との触れあいを求めて－　東海大学外国語教育センター編　一七〇〇円
基礎光学　草川　徹　三二〇〇円
ホスピタリティと観光のマーケティング　P・コトラー他／ホスピタリティ・ビジネス研究会訳　五三〇〇円
コンピュータ実習による情報処理演習　有賀正浩・加藤修一監修　三三〇〇円
国際政治の理論〈現代の政治学シリーズ5〉　中原喜一郎・青木一能編　三六〇〇円
選挙と投票行動の理論〈現代の政治学シリーズ7〉　白鳥　令編　三六〇〇円
あなたという地球－ともだよしぶみ短文集－　友田　好文　二九〇〇円
アイスランド・サガ－血讐の記号論－　J・L・バイヨック／柴田忠作訳　五〇〇〇円
台湾産ハムシ類幼虫・成虫分類図説　木元新作・滝沢春雄　二四〇〇〇円

■東京大学出版会

翻訳の方法　川本皓嗣／井上　健編　二〇〇〇円
未来のなかの中世　草光俊雄／小林康夫編　二二〇〇円
歴史の文法　義江彰夫／山内昌之／本村凌二編　二二〇〇円
子どもの社会的発達　井上健治／久保ゆかり編　二八〇〇円
政策過程分析入門　草野　厚　二五〇〇円
現代マクロ経済動学　浅子和美／大瀧雅之編　六四〇〇円
現代の生命保険（第2版）　刀禰俊雄／北野　実　三二〇〇円
日本人の情報行動　一九九五　東京大学社会情報研究所編　一二〇〇円
生命科学資料集　生命科学資料集編集委員会編　三〇〇〇円
技術知の位相－プロセス知の視点から〈新工学知1〉　吉川弘之監修・田浦俊春／小山照夫／伊藤公俊編　二八〇〇円
樞密院高等官履歴　第七巻　昭和ノ三　国立公文書館所蔵　一四〇〇〇円
帝国議会貴族院委員会速記録　昭和篇87

国立国会図書館所蔵　一三〇〇〇円
帝国議会衆議院委員会議録　昭和篇123　国立国会図書館所蔵　一七〇〇〇円
大日本史料　第五編之二十三　東京大学史料編纂所編　一二〇〇〇円
大日本史料　第一二編之二十三　東京大学史料編纂所編　一五〇〇〇円
人格知識論の生成－ジョン・ロックの瞬間　一ノ瀬正樹　七五〇〇円
近代日本法制史料集　第一八－スタイン答議〈井上毅伝外篇〉　國學院大学日本文化研究所編　八〇〇〇円
村と領主の戦国世界　藤木　久志　五六〇〇円
日本古代史料学　石上　英一　七二〇〇円
在日朝鮮人の「世界」と「帝国」国家　西成田　豊　五二〇〇円
労働の戦後史　上・下　兵藤　釗　三四〇〇円
ヨーロッパ社会の試練－統合のなかの民族・地域問題　宮島　喬　二八〇〇円
福祉と医療（リーディングス日本の社会学15）　袖井孝子／高橋紘士／平岡公一編　三六〇〇円
技術知の本質－文脈性と創造性〈新工学知2〉　吉川弘之監修・田浦俊春／小山照夫／伊藤公俊編　二九〇〇円
文明が育てた植物たち　岩槻　邦男　二四〇〇円
文化としての20世紀〈東京大学公開講座64〉　二八〇〇円
樞密院高等官履歴　第八巻　昭和ノ四　国立公文書館所蔵　一四〇〇〇円
帝国議会貴族院委員会速記録　昭和篇88　国立国会図書館所蔵　一三〇〇〇円
帝国議会衆議院委員会議録　昭和篇124　国立国会図書館所蔵　一七〇〇〇円
大日本史料　第五編之二十四　東京大学史料編纂所編　一二〇〇〇円
大日本史料　第一二編之二十四　東京大学史料編纂所編　一五〇〇〇円
〈法〉の歴史　村上　淳一　二四〇〇〇円
雇用慣行の変化と女性労働　中馬宏之／駿河輝和編　五四〇〇円
発展途上国研究〈リーディングス日本の社会学18〉　山口博一／加納弘勝編　三六〇〇円
技術知の射程－人口物環境と知〈新工学知3〉　吉川弘之監修・田浦俊春／小山照夫／伊藤公俊編　二九〇〇円
風の気象学〈気象の教室4〉　竹内　清秀　二九〇〇円
新編　日本被害地震総覧［増補改訂版］〈CD－ROM版〉　宇佐美龍夫　三〇〇〇〇円
ユークリッド『原論』の成立－古代の伝承と現代の神話　斎藤　憲　四四〇〇円
帝国議会貴族院委員会速記録　昭和篇89　国立国会図書館所蔵　一三〇〇〇円
帝国議会衆議院委員会議録　昭和篇125　国立国会図書館所蔵　一七〇〇〇円
大日本史料　第五編之二十五　東京大学史料編纂所編　一二〇〇〇円
大日本史料　第一二編之二十五　東京大学史料編纂所編　一五〇〇〇円

■東京電機大学出版局

Mathematica による離散数学入門〈新・数学とコンピュータシリーズ10〉　片桐重延監修　二五〇〇円
見る微分積分学－Mathematica によるイメージトレーニング　井上　真　三三〇〇円
マルチメディアビギナーズテキスト　松本　紳　二三〇〇円
第1級ハム教室　吉川　忠久　二七〇〇円

ネットワーカーのためのIPv6とWWW　都丸　敬介　二二〇〇円
現代経営学の再構築－普遍経営学の小歩　岩森　龍夫　三四〇〇円

■東京農業大学出版会

完全版入試問題集　平成9年度入学試験問題と解答　一二三九円
文明開化と造園　針ケ谷鐘吉　一九〇五円

■法政大学出版局

反動のレトリック－逆転、無益、危険性－　A・O・ハーシュマン／岩崎稔訳　二八〇〇円
［新版］古文書学入門　佐藤　進一　二九〇〇円
リビドー経済　J・-F・リオタール／杉山吉弘・吉谷啓次訳　四七〇〇円
ポスト・モダニティの社会学　S・ラッシュ／田中義久監訳　四七〇〇円
愛の探究－生の意味の創造－　I・シンガー／工藤政司訳　二二〇〇円
アメリカ演劇　9－エルマー・ライス特集－　全国アメリカ演劇研究者会議発行　一〇〇〇円
暴虐と忘却－一九四五年以降の政治小説－　R・ボイヤーズ／田部井孝次・田部井世志子訳　五七〇〇円
サウジ・アラビア王朝史　J・フィルビー／岩永博・冨塚俊夫訳　五七〇〇円
ヨーロッパ世界と旅　宮崎揚弘編　三六〇〇円
世紀末社会主義　M・ジェイ／今村仁司・大谷遊介訳　三七〇〇円
凶暴なる霊長類－新時代のエコロジーのために－　J・A・リヴィングストン／大平章訳　三三〇〇円
桶・樽（おけ・たる）I～Ⅲ〈ものと人間の文化史82〉　石村真一　I～Ⅲ各　二八〇〇円
批判理論の系譜学　N・ボルツ／山本尤・大貫敦子訳　三六〇〇円
近代天皇制国家と民衆・アジア［上巻］　松尾　章一　三八〇〇円
思考の図像学　A・フレッチャー／伊藤誓訳　五二〇〇円
メルヘンへの誘い　M・リューティ／高木昌史訳　二二〇〇円

■放送大学教育振興会

■明星大学出版部

特別活動研究　鯨井俊彦編著　一五〇〇円

■早稲田大学出版部

進取の精神　奥島　孝康　二三〇〇円
會津八一－その人とコレクション－　吉村怜・大橋一章　二八〇〇円
漱石の東京　武田　勝彦　二八〇〇円
卒論・ゼミ論の書き方［新版］　早稲田大学出版部編　一〇〇〇円
スウェーデン ハンドブック　岡沢憲芙・宮本太郎編　二六〇〇円
解体新書の時代－江戸の翻訳文化をさぐる－［新装版］　杉本つとむ　二五〇〇円
建築空間論－その美学的考察－［新装版］　上松　佑二　三二〇〇円
アントニオ・ガウディ論［新装版］　入江　正之　三八〇〇円
人間の身体と精神の関係－コペンハーゲン論考一八一一年－　メーヌ・ド・ビラン、掛下栄一郎監訳　四五〇〇円
東南アジア史のなかの日本占領　倉沢愛子編　七三〇〇円
エリザベス朝喜劇10選　第Ⅱ期・全10巻
10　愉快な仲間またの名浮かれ乞食　R・ブルーム／小野正和訳　二五〇〇円
早稲田大学理工総研シリーズ
9　市民のための災害情報　難波桂芳・村上處直・尾島俊雄・片山恒雄　二〇〇〇円
早稲田大学蔵資料影印叢書　洋学篇／第14回配本
第12巻　遠西独度涅烏斯草木譜Ⅰ　杉本つとむ編　三二〇〇〇円

■名古屋大学出版会
ロシア革命論 I M・ウェーバー／雀部幸隆・小島定訳　六〇〇〇円
新資本主義論―視角転換の経済学―　馬場　宏二　三五〇〇円
ジェントルマン資本主義の帝国 I―創生と膨張　1688～1914―
P・J・ケイン&A・G・ホプキンズ／竹内幸雄・秋田茂訳　五五〇〇円
ジェントルマン資本主義の帝国 II―危機と解体　1914～1990―
P・J・ケイン&A・G・ホプキンズ／木畑洋一・旦祐介訳　四五〇〇円
現代制度派経済学宣言
G・M・ホジソン／八木紀一郎・橋本昭一・家本博一・中矢俊博訳　五六〇〇円
井底蛙談　浅井　淳平　二五〇〇円
近代世界システム1730～1840s―大西洋革命の時代―
I・ウォーラーステイン／川北稔訳　四八〇〇円
人種主義 その批判的考察
R・ベネディクト／筒井清忠・寺岡伸悟・清井清輝訳　二八〇〇円
やさしい肩こり、腰痛、シビレの話
見松健太郎・河村守雄　二〇〇〇円

■京都大学学術出版会
鈴鹿本 今昔物語集―影印と考証―（上・下巻）
安田　章編　二三三〇〇円
プルタルコス『モラリア14』〈西洋古叢書第 I・1回配本〉
戸塚七郎訳　三〇〇〇円

■大阪経済法科大学出版部
東アジア共生への道〈アジア研究所研究叢書5〉
武者小路公秀編　二五〇〇円

■関西大学出版部
三國史通俗演義史傳（上）　井上　泰山編　一〇〇〇〇円
太宰・漱石・モームの小説―他作家の影響を探る―
越川　正三　四〇〇〇円
現代日本の企業〈入門〉　上田　達三編著　一六〇〇円
非線形数学入門　山本　登　一九〇〇円
教育を構想する人びと
中城　進　一二〇〇円

■九州大学出版会
戦後日本産業政策の政策過程　松井　隆幸　二八〇〇円
転換期の中国東北経済―拡大する対日経済交流―
高木　直人　三六〇〇円
資本主義経済の発展と変動―マクロ経済学的接近―
薮田　雅弘　三二〇〇円
基礎生物学実験　基礎生物学実験書編集委員会編　二六〇〇円
環黄海経済圏交流への視座―九州からの発信―
西村　明　二四〇〇円
文化と歴史の新しい視点〈九州産業大学公開講座10〉　松原悦夫編　一九四一円
地域とビジネス〈久留米大学公開講座10〉
現代の地域と政策〈熊本大学「地域」研究 I〉
清正　寛・丸山定巳・中村直美編　二二〇〇円
東アジアの文化構造〈熊本大学「地域」研究 II〉
工藤敬一・金原　理・森　正人編　四〇〇〇円
国際社会の近代と現代〈熊本大学「地域」研究 III〉
常葉謙二・古賀允洋・鈴木桂樹編　四五〇〇円
まちを設計する―実践と思想―
鈴木　廣・木下謙治・三浦典子・豊田謙二編　四五〇〇円
現代アメリカ家族農業経営論　長　憲次　三四〇〇円
日本のイプセン現象　一九〇六―一九一六年
中村都史子　四〇〇〇円
現代経済システムの諸問題　川口雅正・濱砂敬郎編　八〇〇〇円
現代経済システムの展望　伊東弘文・徳増倹洪編　三六〇〇円

■東北大学出版会
聴覚と言語の世界　永渕　正昭　三六〇〇円

■流通経済大学出版会
■大阪大学出版会

ISSN 0913-3305

大学出版部協会加盟出版部一覧

北海道大学図書刊行会	〒060 札幌市北区北9条西8丁目　北大構内 TEL. 011-747-2308　FAX. 011-736-8605
聖学院大学出版会	〒362 埼玉県上尾市戸崎1—1 TEL. 048-725-9801　FAX. 048-725-0324
慶應義塾大学出版会	〒108 東京都港区三田2—19—30 TEL. 03-3451-3584　FAX. 03-3454-7029
産能大学出版部	〒152 東京都目黒区自由が丘2-16-5 自由が丘昭和ビル TEL. 03-3724-9101　FAX. 03-5701-7499
専修大学出版局	〒101 東京都千代田区神田神保町3-8-3 専修大学4号館 TEL. 03-3263-4238　FAX. 03-3263-4239
玉川大学出版部	〒194 東京都町田市玉川学園6—1—1 TEL. 0427-39-8935　FAX. 0427-39-8940
中央大学出版部	〒192-03 東京都八王子市東中野742—1 TEL. 0426-74-2351　FAX. 0426-74-2354
東海大学出版会	〒151 東京都渋谷区富ヶ谷2—28—4 TEL. 03-5478-0891　FAX. 03-5478-0870
東京大学出版会	〒113 東京都文京区本郷7—3—1　東京大学構内 TEL. 03-3811-8814　FAX. 03-3812-6958
東京電機大学出版局	〒101 東京都千代田区神田錦町2—2 TEL. 03-5280-3433　FAX. 03-5280-3563
東京農業大学出版会	〒156 東京都世田谷区桜丘1—1—1 TEL. 03-5477-2562　FAX. 03-5477-2643
法政大学出版局	〒162 東京都新宿区市谷田町2—14—1 TEL. 03-5228-6271　FAX. 03-5228-6010
放送大学教育振興会	〒105 東京都港区虎ノ門1-14-1郵政互助会琴平ビル3F TEL. 03-3502-2750　FAX. 03-3592-2482
明星大学出版部	〒191 東京都日野市程久保2—1—1 TEL. 0425-91-9979　FAX. 0425-93-0192
早稲田大学出版部	〒169 東京都新宿区戸塚町1—103 TEL. 03-3203-1551　FAX. 03-3207-0406
名古屋大学出版会	〒464-01 名古屋市千種区不老町1　名古屋大学構内 TEL. 052-781-5027　FAX. 052-781-0697
京都大学学術出版会	〒606-01 京都府京都市左京区吉田本町 京都大学構内 TEL. 075-761-6182　FAX. 075-761-6190
大阪経済法科大学出版部	〒581 大阪府八尾市楽音寺6—10 TEL. 0729-41-8211　FAX. 0729-41-9979
関西大学出版部	〒564 大阪府吹田市山手町3—3—35 TEL. 06-368-1121　FAX. 06-389-5162
九州大学出版会	〒812 福岡市東区箱崎7—1—146 九州大学構内 TEL. 092-641-0515　FAX. 092-641-0172
東北大学出版会(準会員)	〒980-77 宮城県仙台市青葉区片平2—1—1 TEL. 022-214-2777　FAX. 022-225-2029
流通経済大学出版会(準会員)	〒301 茨城県龍ヶ崎市平畑120 TEL. 0297-64-0001　FAX. 0297-64-0011
大阪大学出版会(準会員)	〒565 大阪府吹田市山田丘1-1 大阪大学事務局内 TEL. 06-877-1614　FAX. 06-877-1614

大学出版(第34号)'97夏　平成9年8月1日発行　発行所／大学出版部協会
〒113 東京都文京区本郷7丁目3番1号 東大構内 東京大学出版会内 電話03-3812-2111 (内)7956
頒布価格100円　〒共